

里村欣三所看見的「滿洲」——以「苦力頭的表情」、「近西伯利亞」、「旅順」、「戰亂的滿洲」為主

林雪星

台灣 東吳大學日本語文學系 教授

摘要

里村欣三為了迴避徵兵，二十歲就逃至滿洲流浪。並將這段經驗寫入「苦力頭的表情」。1925年里村參加了剛成立的「普羅大眾文藝聯盟」，1936年出面自首迴避徵兵為止，以普羅大眾作家的身分活動。這樣的人為什麼會成為雜誌社「改造」的特派員而從軍呢？根據高崎隆治所說「里村所關心的並不是戰爭，而是想再一次看看，自己曾經當漂泊者到處漂泊的滿洲各地。隱含著懷鄉的願望是驅動他的最大的理由」。論者認為滿洲事變後做為雜誌社「改造」的從軍記者赴滿洲，這個理由似乎缺乏說服力。以此為契機，本論文想探討里村所看見的滿洲。

里村當作士兵被徵召，曾經走過中國戰場兩年半。昭和17年至20年赴南方戰場報導。本篇論文從里村欣三的作品「苦力頭的表情」「近西伯利亞」「旅順」「戰亂的滿洲」為主，探討里村初期的滿洲像。

關鍵詞：苦力，無言的反抗，異民族，鐵路，滿洲像

受理日期：2020年08月25日

通過日期：2020年10月23日

The "Mianzhou" seen by Kinzou Satomura-mainly "the expression of the coolie head", "Near Siberia", "Lushun", "War-torn Manchuria"

Lin, Hsueh-Hsing

Professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University, Taiwan

Abstract

In order to avoid conscription, Kinzou Satomura fled to Manchuria at the age of twenty. And write this experience into the "hard-working expression". In 1925, the village participated in the newly established "General Public Arts and Arts Union", in 1936, before turning himself in to avoid conscription, as a popular writer activities.

According to Takasaki, the main concern of the village is not the war, but to see once again the various parts of Manchuria where he used to be a vagrant. The hidden desire of nostalgia is the biggest reason to drive him. Some critics think that the reason why they went to Manchuria as an army reporter after the Manchuria incident seems to be unconvincing. Taking this as an opportunity, this paper wants to explore Manchuria seen by Satomura.

Satomura was called up as a soldier and had walked the Chinese battlefield for two and a half years. From Showa 17 to 20, he went to the southern battlefield to report. This essay focuses on the works of Kinzou Satomura, "The expression of the coolie head", "Near Siberia", "Lushun", and "War-torn Manchuria" to discuss Manchuria in the early days of Satomura.

Keywords: coolie, silent resistance, Manchuria incident, different nationalities, The image of Manchuria

里村欣三から見る「満洲」—「苦力頭の表情」、「シベリヤに近く」、「旅順」、「戦乱の満州から」を中心として—

林雪星

台湾 東呉大学日本語学科 教授

要旨

里村欣三は徴兵を忌避するため、二十歳で中国の満洲に逃げて放浪し、その体験を「苦力頭の表情」に書き入れた。1925年、日本プロレタリア文芸連盟が創設され、里村はそれに参加した。1936年に徴兵忌避の逃亡を自首して出るまで、プロレタリア作家として活動している。このような人間がなぜ「満州事変」に雑誌『改造』の特派員として従軍したのか。高崎隆治によれば「里村の関心は戦争そのものにあつたのではない。かつて自分が放浪者として転々とした「満州」の地を、もう一度見ておきたいという、懐郷めいた願望が彼を動かした最大の理由なのだ。」という。満州事変の後『改造』の従軍記者として満州へ渡ったのは、はたしてそれだけの理由だったのか。それをきっかけに里村の見た満洲を求めたい。

里村は兵士として召集され、中国戦場を二年半歩き続けたことがあり、昭和17年から20年までに南方戦場へ赴いて戦場で報道する。本論文は、里村の満洲関連にかかわる作品「苦力頭の表情」、「シベリヤに近く」、「旅順」、「戦乱の満州から」をもとに、里村の初期の満洲像を明らかにするものである。

キーワード：苦力、無言の反抗、異民族、鉄道、満洲像

里村欣三から見る「満洲」¹—「苦力頭の表情」、「シベリヤに近く」、「旅順」、「戦乱の満州から」を中心として—

林雪星

台湾 東呉大学日本語学科 教授

1. 初めに

里村欣三は本名前川二享で、1902年に岡山県に生まれ、1945年2月23日にフィリピン戦線で戦傷死した。里村は徴兵を忌避するため、二十歳で中国の満洲に逃げて放浪した。その体験を「苦力頭の表情」に書き入れた。1925年、日本プロレタリア文芸連盟が創設され、里村はそれに参加した。1936年に徴兵忌避の逃亡を自首して出るまで、プロレタリア作家として活動している。里村欣三は満洲に二回渡ることがあった。一回目は大正十一年（1922年）軍隊に入る前に徴兵を忌避して満洲に逃亡したと言われる。二回目は大正十三（1924年）年秋から大正十四（1925年）年秋にかけて行われた。また、昭和2年（1927）「文芸戦線」の特派員として上海に赴いた。昭和6年（1931）9月満州事変が勃発し、「改造」の特派員として渡満した。

このような人間がなぜ「満州事変」（1931年9月）に雑誌『改造』の特派員として従軍したのか。高崎隆治によれば「里村の関心は戦争そのものにあつたのではない。かつて自分が放浪者として転々とした「満洲」の地を、もう一度見ておきたいという、懐郷めいた願望が彼を動かした最大の理由なのだ。」²という。満州事変の後、『改造』の従軍記者として満洲へ渡ったのは、それだけの理由であろうか。それをきっかけに里村の見た満洲を求めたい。

¹ 「満洲」という言葉は、もともとは17世紀にはおもに民族名を指していたが、地域名に転用されたものである。19世紀以降の日本では満洲、満洲国とは地域をさし、民族は「満洲族」と呼ぶようになった。里村の作品で使われる漢字は「満州」である。

² 高崎隆治（1998.10）『ボルネオの灯は見えるか』大空社 p. 25

里村は兵士として召集され、中国戦場を二年半歩き続けたことがある。昭和17年から20年まで南方戦場へ赴いて戦場で報道する。里村欣三の満洲関連の作品（特に満州逃亡に関する作品）は大家真悟によると、小説、随筆、挿話に分けられる³。

本論文によって、里村の満洲放浪にかかわる作品「苦力頭の表情」、「旅順」、「シベリヤに近く」⁴、および改造社から特派されたルポルタージュである「戦乱の満州」をもとに、里村の初期の満洲像を明らかにしたい。テキストは『里村欣三著作集第10巻』（大空社出版）と『戦火満州に挙がる』（昭和戦争文学全集I、集英社出版）によるものである。また、本文の旧仮名遣いと旧漢字は、読みやすくするため、現代仮名遣いと当用漢字に書き換えることにした。

2. 苦力へのまなざし

高崎隆治によれば、里村欣三は「脱走兵」ではなく、「忌避者」である。二十歳の時、日本を逃れて「満洲」へ渡った里村は、憲兵の視線を避けるために、ハルビンなど日本人が稀な所へ行った。そこは日本の憲兵からは安全であるのと引きかえに、飢えと寒さの中で、命が奪われるほどの極限状態に追い詰められた。当時は中国の最下層の労働者苦力たちに助けられ、その友情と好意によって生き、そ

³ 大家真悟（2011.5）『里村欣三の旗—プロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』論創社 pp.183—184。満州逃亡に関連する作品は以下のようである。①「河畔の一夜「放浪挿話」その一」（『文芸戦線』）1925年11月号）②「モヒ中毒の日本女—放浪挿話—」（『文芸戦線』）1926年2月号）③「苦力頭の表情」（『文芸戦線』）1926年6月号）④「飢」（『解放』）1926年8月号）⑤「北満放浪雑話」（『中央公論』）1927年7月号）⑥「国境の手前」（『東洋』）1927年9月号）⑦「放浪の宿」（『改造』）1927年12月号）⑧「放浪病者の手記」（『中央公論』）1928年5月号）⑨「旅順」（『文戦』）1931年1月号）⑩「ハルピンの記憶」（『東洋』）1931年9月号）⑪「ハルピンのメーデーの思ひ出」（『新文戦』）1934年5月号）。そのうち、③、④、⑥、⑦、⑨は小説で、⑩、⑪は随筆、①、②、⑤、⑧は挿話である。大家真悟は里村欣三の満州逃亡の足跡を見せる作品を①から⑪まで取り上げるが、本論文に関わる「シベリヤに近く」は、まだ日本のシベリヤ出兵の雰囲気の色濃く残るハルビンに里村が滞在したことから構想された作品だと思うから、大家真悟はそれを除外した。「戦乱の満洲から」は満州事変直後の昭和6年11月下旬から12月中旬に、改造社から特派されたルポルタージュであるから、逃亡に関する作品ではない。

⁴ 「シベリヤに近く」『戦争ニタイスル戦争』1928年5月25日、南宋書院

の体験を「苦力頭表情」に書き入れた。「苦力頭表情」、「シベリヤに近く」、「旅順」三作の共通点は苦力が描かれていることである。まず、「苦力頭表情」から見てみよう。

『苦力頭表情』は1926年「文芸戦線」6月号に発表され、1927年春陽堂で刊行、プロレタリア作家として文壇に認められる。1929年『苦力頭表情』『黒い眼鏡』『疥癬』『放浪の宿』、『十五銭白銅』の五編が新興文学全集第七巻に収められている。「苦力頭表情」の前半は、ロシア人娼婦との出会いと、彼女との三日間の娼館生活の場面である。後半は持ち金がなくなりそこを追い出され、やむを得ず中国人苦力の仲間に加わって働く姿が描かれている。放浪する「俺」は「淫売宿をオン出」て、「支那街の薄汚い豚や硝子の転がった空地」に寝転んでいた。この「俺」の周りを輪になって取り囲む「支那人」と輪の外に遭って黙々とマントウを食べている「苦力」である。前者の支那人はただ好奇心をもって「俺」を眺めていた。「俺」が彼等に何かコミュニケーションを求めるころ、彼等はただ手を叩いて笑った。後者の者は「俺」に見向きはせず、さらに、「俺」の接近を拒絶する。「人にコキ使われて、自己の魂を売ることが俺には南京虫のように厭だった」(p.21)と思っている。「俺」は、生きるために「労働者」として働かなければならない。語り手の「俺」は三日三晩十分に飯も食べていなかった。そして言葉もできないまま、身振りで腹の空いた真似をして、中国人の苦力に食べ物を求めた。しかし、苦力が「獰猛な獣の吼えるような叫び声をだして俺の手を払い退けた」(p.26)。「俺」は苦力に「不潔」で、「獰猛」と言った差別的な視線を持っている。苦力達は、「用意の出来ていた食物を、前の空地に運んで貪りついた。一日十五六時間も働いて、日の長いのに三度の飯は腹が減るのは無理もなかった(p.27)し、「俺」にくれなかったのは悪意というよりも、自分の生命維持に必死だったというべきであろうか。行くところもない「俺」は「アバタ面の一際獰猛な」苦力頭に肩をつかまれて、部屋から出ていけと追い出されても、その暗い土間の隅に貼り付いていた。翌日の朝、朝食の時、苦力達が「俺」

を無視した。物乞い同然の日本人である「俺」を中国人がやさしく仲間に入れてくれるはずはなかった。「苦力達」だけではなく、苦力頭が無視するのも当然である。無視されても、「俺」は仲間入れのために、苦力達のあとについて道路のネボリを努力する。苦力達は「まさか日本人に土方という稼業はあるまいと思ったに違いない。支那に来ている日本人はみんな偉そうぶって、苦力を足で蹴飛ばしているわけ」(p.27)だからである。苦力達が日本人の「俺」は土方の稼業をしたことに驚いた。というのは、満洲にいる日本人は五族の中で人数が一番少ないが、身分が高く、満人を管理している人達であるというステレオタイプが満人の印象に深く刻まれている。「俺」という日本人は、その位置づけが全く逆になったのである。昼めしの時、苦力の一人が俺にマントウと茶碗に一杯の塩辛い漬物を食べと言って突き出した。しかし、「俺」は「熱い湯を呑んで、大根の生まをかじっ」(p.27)で過ごす。すなわち、マントウという食べ物が慣れなくて、それを断って、大根を生でかじって我慢する。ところが、「俺」が部屋に入るとき、あれほど無視と傍観を繰り返していた苦力頭は俺を見て、「はじめてにこりとアバタ面を崩して笑った。そしてブリキの盃を俺に突き付けた」(p.27)。「俺」は「大将！俺を働かしてくれるか有難いー」(p.27)と叫んだ。苦力頭は感慨深い眼で俺を眺め、そして慰めるように肩を叩いて盃を揺すぶった。

一やがて喰い物にも慣れる。辛抱して働けよ。なア労働者には国境はないのだお互いに働きさえすれば支那人であろうが、日本人であろうが、ちっとも関わったことはねえさ。まあ一杯過ごして元気をつけろ兄弟！苦力頭のアバタ面にはこんな表情が浮かんでいた」(pp.27-28)

苦力頭の話「労働者には国境はないのだお互いに働きさえすれば支那人であろうが、日本人であろうが、ちっとも関わったことはねえさ」には「俺」が彼等に受け入れられたという印象があった。峯

村康広によれば、「〈空腹＝弱さ〉を基盤に据えた人間関係の端緒が開かれるのであるが、このような人間関係の変化は、同時に「俺」の心の動きにも変化を与える」⁵という。すなわち、言語で意思疎通ができない「俺」は、苦力頭表情を慰めるように感じられたのである。表面から見れば、同じ労働者は言葉を越えて結びつくように見えるが、実際には、「弱者」を基盤にして、「俺」と「苦力」との国境を越えた結びつきではないかと思われる。また、大家真悟は『苦力頭表情』はこの末尾が無ければ「他の諸作品と同様に満州放浪譚の一つにすぎない」⁶と述べている。しかし、綾目広治は「苦力頭表情」には里村欣三のプロレタリア文学だけでなく、その後の文学にも共通してみられる特質があることに注目したい。何よりも、里村欣三の眼が半ば植民地化された地域の「淫売婦」や「苦力」たちにむけられていることである。⁷と指摘する。確かに、里村欣三の作品・「黒い眼鏡」「疥癬」「放浪の宿」「十五銭白銅」「旅順」を見ると社会の最底辺に生きている人達に関心を持っていることが窺われる。

同じ苦力に目を向けた「旅順」を見てみよう。「旅順」は1931年一月『文戦』に発表されたものである。「旅順」には、語り手の「私」は軍用人夫の出し入れを専門とする、ある「組」に雇われている。ある日、日本軍司令部の倉庫に飛行機の部材を運び込んだ時、その「薄暗い地下室」でひたすらポンプで水を汲み上げ続ける「不思議な苦力」に出会ったエピソードを回想して語るという話である。「私は「番兵の隙を見て、不思議な物音に惹きつけられたように薄暗い地階を降り始めた。」(p.107) その地下室の場面では「物語で聞いた血の池地獄の凄惨な気持ち」(p.108) を呼び起こした。「苦力が水の

⁵ 峯村康広(2013.3)「里村欣三「苦力頭表情」から「旅順」へ『里村欣三の眼差し』p.88 里村欣三顕彰会・編 吉備人出版

⁶ 大家真悟(2011.5)『里村欣三の旗—プロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』、論創社

⁷ 綾目広治(2013.3)「里村欣三論—弱者への眼差し」『里村欣三の眼差し』里村欣三顕彰会・編 吉備人出版 pp.13-14

上へ板を二枚渡した簡単な足場の上で、まるで死人のようにもぞもぞと鈍い影をひきずって動いている姿」(p.108)を語り手の「私」は見た。「弁髪の頭、瘡せて骨ばった顔が骸骨のようにまっ青だ」(p.108)と「私」は苦力の老人を描く。老人は旅順攻防戦(日露戦争 1904年)⁸から三十年近くずっと地下室でポンプで水をくみ上げる仕事をし続ける。「私」は「戦争の当時からなんだね…?」と「戦争」のことを言い出すと、老人は「非常に恐ろしい記憶を呼び起こすような剣幕で激しい身震いしながら両手を広げて叫んだ」(p.109)と「私」は観察した。日露戦争の戦闘は、1904年2月8日、旅順港にいたロシア旅順艦隊に対する日本海軍駆逐艦の奇襲攻撃(旅順口攻撃)に始まった。戦争の激しかった様子は老人の表情から見ても想像できる。しかし「私」は「おかみさんはあるかね…?」(p.109)と訊いたら、老人は垢だらけな瘡せた腕を猿のように伸ばして私の胸倉へ掴みかかった」(p.109)。なぜ「おかみさん」のことを聞くと、老人は激怒したのだろうか。老人の妻がその戦争で亡くなったという可能性があると推測できる。

この地下室を持っている倉庫は、赤いロシアの煉瓦建ての重苦しい建物であった。その中には何人も覗くことが許されない、精巧な武器や弾薬が隠されていたに違いないと「私」は推測する。「私」は三十年近くずっと地下室でポンプで水をくみ上げる仕事をし続ける老人のことに對して、「それは一馬力のモーターの電力よりも、老苦力の賃銀が安い為だ。たったそれだけの理由で一苦力の一生涯が、薄暗い、不潔な、地下室の中で腐っていくのだ」(p.110)と批判している。

最後に「シベリヤに近く」を見てみよう。「シベリヤに近く」は 1928

⁸ 日露戦争(にちろせんそう)は、1904年(明治37年)2月8日から1905年(明治38年)9月5日にかけて大日本帝国とロシア帝国との間で行われた戦争である。朝鮮半島と満州の権益をめぐる争いが原因となって引き起こされ、満州南部と遼東半島がおもな戦場となったほか、日本近海でも大規模な艦隊戦が繰り広げられた。最終的に両国はアメリカ合衆国の仲介の下で調印されたポーツマス条約により講和した。

年5月『戦争に対する戦争』（南宋書院出版）に刊行された作品である。まだ日本のシベリヤのいい雰囲気の色濃く残るハルビンに、里村が滞在したことから構想された作品である。隊長と軍属の高村の対話から見ると、日本軍は中国人を苦力として雇ったが、苦力に対する考えは「支那人といふ奴は、金にさえなれば、どんな我慢でもしますよ。」(p.4)「奴等は少しも利益を貪る以外には、奉公の観念がないのだ！」(p.7)というマイナスのステレオタイプを持っている。「苦力達は青草の原に隊列を離れて寝そべりあぐらを組んで、兵卒や苦力頭が声高く罵り怒鳴り、威嚇する銃剣や鞭に対して、執拗な沈黙と拒否の態度を固持していた。」(p.7)即ち、何かの原因で苦力達は拒絶の姿を示し、働き続けないのである。軍属の高村は苦力達が日本軍の輸送を遅延せしめようという計画を立てているので、鎧重車を運ぶことを拒否すると理解する。そしてその苦力たちを撃ち殺した。まるで苦力を人間として扱わず、畜生のように撃ち殺した場面が描写されている。

「苦力頭の表情」には中国の苦力達は自分より惨めな日本人の「私」を助けてあげた場面が描かれている。それはプロレタリア同士は言葉を越えたように結び付くだけでなく、国境を超えて「弱者」を憐れんだりする人間の暖かさではないかと思われる。一方「旅順」は戦争に一生奴隷のように扱われている老人を通して、戦争の惨めさや人道ではないことを明らかに批判する。最後の「シベリヤに近く」には、苦力を畜生のように撃ち殺した場面を通して、日本兵の怖さと戦場の人間性を失っている鬼のようになった姿を暗示している。

3. 無言の抵抗

満州事変直後、二、三か月の現地の情勢、雰囲気を伝えるものは林芙美子の「シベリアの三等列車」と里村欣三の「戦乱の満州から」である。前者は事変が起こった二か月後、満洲を旅行したことを取材したものだ。後者は事変が終わった三か月後に満洲を旅行したこ

とをえがいている。林の「シベリアの三等列車」についてはここで触れないが、「戦乱の満州から」に注目したい。1931年、里村は『改造』雑誌の特派員として、「満州事変」に従軍し、戦線のルポ「戦乱の満州から」を1932年『改造』2月号に発表したものであり、事変が含む複雑さによく触れている。全編は「呼吸のない死の街」、「死馬の肉」、「鉄道戦争」と「不幸な犠牲者群」によって構成されている。

語り手の「私」は、新民駅を降りてみた光景が、まるで「呼吸のない死の街」であると描いている。「支那町特有の雑音と喧騒」や「家々の軒からは賑やかなストーブの煙が立ちのぼる」(p.20)風景は見られない。街には日本軍の警備兵に行き違うだけで、人通りは少ない。新民屯は新民県公署の所在地で、日本領事館の分館もあり、事件前、県知事はすでに姿をくらまし、市中警備の公安隊も逃げて、市中はガラ空きの有様である。お金持ちの商売人も役人もどこかへ避難して姿をみせない。市中に残留しているものは、少数の苦力と小商人だけだと「私」は語っている。ここで触れたのは満州事変が終わった三か月後の新民屯(1931年奉天省に属する)の光景であった。市中に残されている商売人は、いくら「日本軍の入場を心から歓迎し、市民は安堵してその業務にやすんぜよ」(pp.20-21)という布告がはりだされても、店を開く人はひとりもない。奉天よりは二十里しか離れていない新民屯では、「張学良」に属する東北兵隊や「匪賊」(ゲリラとも言える)や「日本軍隊」に挟まれた庶民は、厳しい状態に置かれている。戦地を報告する「私」は、こちらでは日本金は通じないので、全く「経済封鎖」の状態、住民や日本の守備兵の不便不自由が想像できると語っている。

また、「私」が列車に乗っているうち、将校の社会主義者と支那人との愛国心を取り上げて比較する場面がある。一人の将校は厚着をした支那人が結氷を砕いて、魚を釣ったり網を打ったりしている場面を見ると、「あれをみる。支那人というやつは、呑気なものだ。自分の国がどうなろうと、やつらには愛国心というものがミジンもな

いだからなあ、あきれたものだ！」(p.18)と揶揄している。しかし、通訳らしい人は「いや、あいつらは戦争がおきようと、土匪の襲来を受けようと、掠奪される何物もない貧農だから、あんなに呑気に構えているんですよ。すこしでも財産のある連中は、とっくに何処かへ避難していますよ」(p.18)と将校の見方を否定する。それを見て語り手の「私」は貧富の激しい国では、「国家の保護からまったく度外視されている貧民に、愛国心を期待するのは無理だ」(p.18)と解釈する。果たして貧民は愛国心を持っていないのか。のんびりと魚を釣っている中国人は貧農だから、行くところもないまま、その運命を受け入れるしかないだろう。日本人の将校は目の前の事を見て、すぐ中国人に愛国心がないと批判したが、それは中国認識があまり浅いのではないかと、「私」を通して里村は指摘する。

一方、日本人の将校は、日本の社会主義者は「喰う手段のために」やむを得ぬ選択で、いざとなると「一死報国の精神」に変わると語っている。社会主義者の「私」は将校の話聞いていくらか疑問を持っている。青森出身の若い兵隊は故郷の凶作について全く分からない。戦時勤務であるため、国もとへ手紙を出すことや国もとから手紙が来ることは一切禁止される。日本本土では、経済状態が厳しければ、若い兵隊は除隊後に満鉄へ志願しようと思っている。すなわち、戦争が終わったら、日本国内の経済が厳しければ、満州に残って「満州鉄道会社」に勤めようと思っているのである。それは、日本が戦争に勝てば、また満洲国が存在するという前提で成立する。実際には、戦争が終わると同時に満洲国も潰れてしまったのである。

ところで、社会の最低層に置かれている中国人は、事変の後、行くところもなく、現実をそのまま受け入れるしかないので、順民として日本の軍用列車を「万歳！万歳！」と熱狂的に送っている。それは中国庶民の戦乱中のやむを得ない生き方に違いない。さらに、中国人は底の深い力が潜んでいるので、決して自分の国はどうなろうとちっとも関心のない人々ではない。彼が無言の態度で日本軍隊に面することを無視してはならないと、「私」は勝利した日本軍が興

奮している様子を見た中国人の群衆を以下のように描いている。

日本人の熱狂を見ずのようにひややかに見守っている群集がある。それは在留日本人二万数千人に対して四十万の圧倒的多数を占めている、支那人だ。

彼等は一生涯にいちども経験しない、この日本人の熱狂の乱舞を、きわめて冷然とながめている。車ひきは洋車のながえを頭のうえへ押し上げて、軍隊の行進に路をあけている。まんまるくなるほど厚着をした群衆が、長い丸太のような袖の中へ両手を突っ込んで、静かに足ぶみをしながら戦争を、ひとつのようにながめている。それは恐るべき無言の屈服だ！（p.27）

以上の引用から日本兵が入って来た奉天では、逃げられない中国人が、両手を袖に突っ込んだまま、他人事のように「冷然」の視線で日本兵の興奮状態を見ていることがわかる。満州事変が終わったばかりで、関東軍は国連の干渉にも関わらず、錦州へ攻撃に進む。その熱狂的な様子を見ている東北の中国人は、冷静な態度でそれを見ている。当時張学良は東北軍を支配していたが、蒋介石の不抵抗主義という命令を受けた張学良は、有効的に関東軍の侵略を阻止することはしなかった。そのためか三か月の間、日本関東軍は東北三省を占領するようになった。四十万の中国人は二万の日本軍が自分の国の土を行進して占領することを眺めながら、どうしようもできない無力さで、見ることしかできなかった。そこには異様な反抗の姿が現れているのではないかと、語り手は「無言の屈服だ」と一言に帰した。

4. 各民族が流離している満洲

満洲は異民族が流離しているところであるということが里村の作品に見られる。「苦力頭表情」にロシア娼婦や「戦乱の満州から」に朝鮮人の農民、在満の日本人の浮浪者や商人、兵隊などが登場す

る。「俺」は淫売婦の木造の家へ行った。「眉を刷いた眼元に小皺がよっていた」ロシア娼婦はもう若くなく、「白い指に、あくどい金指輪の色が長い流浪の淫売生活を物語っているような気が」(p.18)した。「俺」は女とセックスする気がなかったが、セックスしないと、女は商売できなくなる。そして、「俺」はウオッカを飲んで女とセックスした。そのプロセスで女の「苦痛にゆがんだ無理な微笑に気が付くと、はっと手を引いた。酔いがさめて、女の白い屍肉が、一箇の崇厳な人間の姿」(p.19)になった。しかし、三日目になると、財布のお金が無くなった時、女は「出ていけ」という振りをする。その時、ロシア娼婦は「年増女に不似合な緑色のリボン、水色の洋服、どうみたって淫売婦！」(p.25)に戻った。「俺」は「崇厳な人間」、「母親の慈愛を感じている」女から、実は女が性交渉を仕事として働いている「淫売婦」である現実に戻った。そのプロセスには、女へのイメージを「俺」は勝手に想像するしかなかったと思われる。

また満洲にいる日本人は軍人、役人、開拓民のほかに、商売人が存在している。満蒙の面積は「七万五千三百九十二平方里、人口三千万強」、「權益と資源は無尽蔵」(p.29)だと思って、「空手空拳で渡満しても、それは屁にもならない」(p.29)というのが満洲にいる日本人の口癖だと里村は語る一方、「面積の広さと、物質の量だけが、決して貧乏人の飢餓を救うものではない」(p.29)ということも事実であると指摘する。実際、厳しい寒い満洲での生活は、それほど住み心地がいいのではなく、中国語もできない日本人は商売する相手は日本人しかないので、一攫千金の夢を持って満洲に来た日本人は無謀ではないか。

さらに、朝鮮人が中国の東北に流れこんだ理由は、いろいろあるが、経済の目的や植民地から逃げ出すためなどである。満洲各地へ流れ込んだ朝鮮人数は 1930 年には二百万人以上に上っているそうである。彼らは「小作人になり、農奴となって、惨酷な境遇のなかにかろうじて生存を続けてきた」(p.36)人々である。里村が描いている朝鮮人の農業移民は、中国の地主に圧迫され、「氷点下三十度

の酷寒」で「素ハダシだ」という姿である。朝鮮農民の避難民は「野にも死んでもよいから、いちど生まれ故郷へ帰って死にたい」(p.34)という要求もある。彼らはなぜ満州事変の後、もとにいた所へ帰りたくないのだろうか。それは「敗残兵も出沒で現地の状態が危険」なために、撫順民会に収容されているからだろう。また、「支那官憲はこの無力な鮮農のうえにあらゆる圧迫迫害の魔手をふるって」(pp.35-36)きたのである。なぜかと言うと、中国政府は朝鮮農民の小作を禁じて、支那人地主の雇用人に変更したからである。雇用税は鮮農から徴収されるからだ。土地政策が変わるとともに、中国東北地方を流離っている朝鮮の農民も社会最低層という位置に置かれて悲鳴を上げるしかない。「私」は指摘する。

5. 戦争への視線

橋川文三によれば、里村欣三の「戦乱の満州から」というルポタージュは、「いくつかの点で、事変の含む複雑、奇怪な性格によくふれている。一つは事変を「鉄道戦争」という角度から描いていることであり、もう一つは、事変の渦中における朝鮮人移住農民の姿を取られていることである」⁹という。橋川の言う通り、里村は「戦乱の満州から」には満州事変と鉄道戦争とのつながりに触れている。

今回の事変で特筆されなければならないことは、満鉄が軍司令部と一身同体となって活躍しためざましい働きであろう。もし満鉄の絶対な援助一軍部の手足のごとく自由無碍に働きうる能力がなかったならば、満州軍のあの疾風迅雷的な行動と勝利が期待されなかった、といわれている。(p.30)

即ち、満州事変は鉄道が大きな助力になったはずである。里村は満

⁹ 橋川文三(1964.11)「解説」『戦火満州に挙がる』昭和戦争文学全集 1 集英社 p. 493

鉄と軍司令部とが一身同体となって働いていたという事には、満鉄と軍司令（言い換えれば関東軍）とが事前計画しているのではないかという疑念を持っているのではないか。「関東軍指令部から電話があつて二十分たらずの時間で、軍用列車を仕立てた満鉄の敏速な行動である」（p.30）と書いている。また、「平常からの緻密な運転計画と用意がなくては、けっして突発事に際して速断しえない冒険であることが想像される」（p.30）という。表面から見れば、それは満鉄が平常からの運転計画を厳密にしているため、事変の当日関東軍とうまく協力してくれた。しかし、一般から考えれば事前の計画でなければ、満鉄によって、関東軍が快速に移動することはできないだろう。

満州の鉄道の建設では日本からの借金があつた。四洮鉄道は四平街から洮安まで長さ312キロの鉄道である。この鉄道を建設する東北地方政府は建設中、日本に膨大な借金をしていた。さらに借金を返す能力がないので、その鉄道の利権を失ってしまい、南満鉄道の支線になり、日本の北満を侵略する鉄道になってしまった。一方から見れば、東北の経済や交通の便利にも鉄道の建設は不可欠なものである。洮昂鉄道¹⁰や吉長鉄道¹¹はそれぞれの社会背景がある。事変の後、満鉄会社に経営されるようになり、それによって、北満時代に勤めている従業員は、日本語が分からないので、事故が起こったことや、時間厳守の南満鉄道のルールに慣れていないなどの理由で、いつか首になる恐れがある。それについては、日向伸夫が「第八号転轍機」で触れている。しかし、里村は「けっして従業員の淘汰、首きりなどはいまのところ考えられそうにない陰気な杞憂にすぎない」（p.30）と語っているのも事実である。両者の違いはただ時間の差にあるだけであると思う。

¹⁰ 洮昂鐵路は土木、中日合作する東亜会社に引き受け、1925年5月28日に建設が始まり、翌年7月4日に完成される。

¹¹ 吉長鉄道は吉林省吉林市から朝鮮の会寧までの鉄道である。中国の国内には吉林から長春まで、吉林から敦化まで、敦化から図門までの三本の鉄道によって構成される。日本は吉会鉄道の建築権を取って、1933年完成された。

6. 終わりに

以上の作品から里村欣三は中国の苦力の描写をシリアスに描くことが見られる。さらに、日本軍隊の苦力を酷使する場面や苦力を銃殺する光景もはばからずに描写している。また、満州事変後の地元の中国人、特に一般の庶民や苦力の無言な態度を見て、それはのんびりとしたものではなく、やむをえず底深い抗議の一つだと窺われる。次に、満州をさすらっている異民族、ロシアの淫売婦や朝鮮農民や夢を見ている日本人の商売人などが挙げられる。そのうち、朝鮮農民の惨めな様子がシリアスに描かれている。最後に、満州事変に関係する満鉄は十分にその役割を果たしてくれているということも明らかである。鉄道は経済や軍事に必要不可欠なものである。東北の鉄道の建設は満州事変以前から日本と切っても切れない関係があったと言えよう。里村の書いた「戦乱の満州から」には関東軍の素早い行動は、満鉄の協力がなければ不可能だったと関東軍の事前計画が指摘される。

テキスト

1. 里村欣三（1929.7）「苦力頭の表情」『新興文学全集第七巻日本編Ⅱ』平凡社。初出、『里村欣三著作集第一〇巻』（1997. 3）高崎隆治監修 大空社
2. 里村欣三（1928.5）「シベリヤに近く」『戦争に対する戦争』南宋書院、初出、『里村欣三著作集第一〇巻』高崎隆治監修 大空社
3. 里村欣三（1964.11）「戦乱の満州から」『戦火満州に挙がる』昭和戦争文学全集 1
4. 里村欣三（1997.3）「旅順」『日本プロレタリア文学集・10「文芸戦線」作家集（一）』（新日本出版社 1985. 11.）『里村欣三著作集第一〇巻』（1997.3）高崎隆治監修 大空社

参考文献：

- 1.橋川文三（1964.11）「解説」『戦火満州に挙がる』昭和戦争文学全集 1 集英社
- 2.高崎隆治（1998）『ボルネオの灯は見えるか』大空社
- 3.大家真悟（2011.5）『里村欣三の旗ープロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』論創社
- 4.高崎隆治（2013.3）「里村欣三の人間像」『里村欣三の眼差し』里村欣三顕彰会・編 吉備人出版

付記：本稿は 2019 年 10 月 27 日台北東呉大学で開催された「第七回東アジアと同時代日本語文学フォーラム」での口頭発表での基づき、大幅に加筆修正したものである。